

私が目指す酪農経営

岡山県立高松農業高等学校
畜産科学科 2年 三宅 春香

私の家は、岡山県倉敷市の中心部から北西に位置する弥高山、戦後の開拓で切り開かれた山中で酪農をしています。現在は父と母で、搾乳牛46頭、育成牛18頭を飼育しています。

我が家の酪農の始まりは、昭和33年に祖父が一頭のホルスタイン種を飼ったのがきっかけでした。当時は地域の半数近くの20戸の酪農家でしたが、後継者不足や環境問題など、酪農が抱える問題等により、年々減少し、現在は8戸になってしまったそうです。ここは養鶏場も大変たくさんあるいわゆる畜産団地。市街地と隣接しているわけではありませんが、ハエの問題や悪臭、汚水など、様々な問題を抱えています。我が家には4ヘクタールの飼料園がありますが、傾斜地が多く、年間を通しての良質の自家飼料を給与することができず、ほとんどが購入飼料に頼っているのが現状です。

私が小さい時の遊び場は牛舎。自分の背丈の倍はあろうかという「糞かき」を振り回して、糞掃除などを手伝う事が楽しくてしかたありませんでした。その頃は、まだ後を継ぐという考えはありませんでしたが、牛が大好きな気持ちはその頃からずっと変わらずもっていたように思います。その事にはっきりと気がついたのは高校受験の時。近くの学校、中学時代から活動していた部活動が続けられる学校、色々悩んだ結果、私が選んだ学校は、岡山県で唯一乳牛を飼育している高松農業高校でした。ただ、その時から、将来酪農をしたいと考えていたわけではありません。入学して1年半が経ち、朝の飼養管理、夕方の搾乳作業、担当牛の世話、そして他の牧場の視察や共進会の見学を通して、少しずつですが、自分の中で「将来酪農をやってみたい」という気持ちが沸いてきました。

私は高農に入って初めて、フリーストール牛舎を知り、ミルクパーラーでの搾乳を経験しました。それまで、我が家のタイストール牛舎しか知らなかったもので、フリーストールでのんびり自由になっている牛たちや、パーラーで搾乳される牛たちを見るのは、とても新鮮で感動しました。実際に自分が除糞や搾乳作業をやってみると、知らず知らずのうちに我が家の方式と比較していました。

まずは除糞。我が家の牛舎は牛床の直ぐ後ろをバーンクリーナーが通っており、こまめに糞を落とすことができるため、牛を清潔に管理することができます。一方フリーストールでは、牛たちの重要な移動空間になっている通路に糞尿が貯留し、滑りやすい状態になっているため、どうしても肢蹄の事故が発生します。対策として豊富な敷料を使ったり、送風機で適切な換気を行っていますが、タイストール牛舎もあながち捨てたものでもないと感じました。

次は搾乳です。重たいミルクカーを運び、牛から牛へ人が動く我が家の搾乳方法は、労働的に大変だと感じていました。パーラーで搾ってみると驚きです。待機所から搾乳室へ、

牛自らが入り、搾乳が終わると牛が一人で出て行く、人ではなく、牛が動くという我が家とは正反対の方法に驚きました。今年の夏休みには、まだ岡山県で数軒しか導入していないロボット搾乳をしている酪農家さんを見学させていただきました。初めてロボットでの搾乳を見ましたが、本当にすごかったです。センサーで乳頭の位置を感知するところから始まり、ディッピングまでの作業を全て機械がやっていました。また、農家さんから「24時間搾乳をしているよ。牛が搾ってほしい時に搾るんだ。」と聞き、朝夕2回の搾乳が当たり前だと思っていた私にはまさにカルチャーショックでした。これこそ、究極の牛に優しい搾乳なのかもしれないとも思います。しかし、酪農は牛から乳を頂いている農業。その乳は自分の手で搾りたいと今は思っています。なにより、搾乳がとても楽しくてしかたありません。まずは搾乳技術を完璧にマスターすること、それが今の私の第一目標です。どんなに技術が進歩しても操作する人間が、確かな技術と知識を持っているかが重要なのではないのでしょうか。

2年生になってからは、家畜審査の勉強も始まりました。今までは牛の体型について細かく見たことがありませんでしたが、共進会の見学や勉強を進めていくうちに、牛の美しさに惹かれていきました。家畜審査の勉強のために、カナダやアメリカの共進会や牧場が映っているDVDを学校から借りて何回も観ました。そこには、堂々とした本当に美しい牛たちが並んでいて感動しました。私もいつか外国へ行って、本場の共進会を実際に見てみたいとも思います。

こうした、数々の経験と発見をした1年間が終わり、2年生となった私には、「将来、我が家の酪農を継ぐ」というはっきりとした夢、目標、そして覚悟が生まれました。そんな話を父母にすると、うれしさ半分と「自分の苦勞を考えると娘にその苦勞をさせていいのか。」といった心配半分の複雑な心境のようです。

しかし、私には将来家を継いだ時、実践したい5つの夢があります。

まず第1に、フリーバーン方式の牛舎の実現。フリーバーン牛舎は床を土にすることで、牛が安心して歩けるのでストレスの軽減につながります。また、床に傾斜をつけて、糞尿が下へ流れることで、牛体が汚れることを最小限に抑えたいと考えています。

第2に、ミルクパーラー搾乳とミキサーフィーダーによるTMR給与。これにより、現在よりも労働力の軽減がはかれるとともに、衛生的な搾乳と効果的な飼料給与ができるはずです。

第3に、自家粗飼料の生産。飼料自給率の問題や飼料価格の上げ止まりの問題に続き、家畜の飼料へも安心・安全がもとめられる時代となった今、購入濃厚飼料中心の大量生産方式の酪農から、その地で採れた草を食べた牛が乳を出す。その乳を地域の消費者に提供する。これこそ、究極の地産地消ではないのでしょうか。その為に必要な飼料園は、

酪農を辞めた家の飼料園の借地や休耕田、耕作放棄地の活用などにより確保出来ると思います。

第4に、牛群検定。以前、我が家も牛群検定を行っていましたが、父の入院を機に辞めました。家畜改良事業団のデータによると、現在の牛群検定の参加率は、北海道で6割強、全国平均では5割ちょっとだそうです。しかも、検定に参加していても、毎月送られてくるデータは積み上げられるだけで、十分活用されていない農家も多いと聞きます。牛群改良は人間ドックと同じ。その結果を活用して、次の酪農経営に生かす。繁殖・飼養・育種・改良等々。大規模経営が困難な本州での経営だからこそ、乳牛の育種改良や飼料設計が進み、その牛の能力を極限まで高めた飼育管理を行う時代だからこそ、牛群検定を活用しデータに基づく酪農経営を実践していく。IT社会といわれ始めて久しい今、この利点を酪農に生かさない手はないと思います。

第5に、完全なる糞尿処理。現在の我が家では糞をビニールハウスに入れ、機械で攪拌・乾燥させています。冬などの低温時にはなかなか乾燥せず、困ることが多くあります。私はビニールハウスの増築と共により効率的な処理方法にも取り組みたいと考えています。環境問題に加え、エネルギー問題も深刻さを増している現在、「牛糞からエネルギーを取り出すシステムもある。」と畜産の授業で勉強しました。地域とも連携しながらこうした事にも積極的に取り組みたいと思います。

これらの夢は、今はまさに夢でしかありません。これを実現するためには、費用もかかりますが、私自身にしっかりとした知識と技術、そしてなによりも多くの仲間達とのネットワークが不可欠だと思っています。そこで、高校卒業後は、酪農を専門とした大学で学びたいと考えています。

幼い頃「遊び場」だった牛舎は今、「挑戦の場」へとかわりつつあります。背丈の2倍もあり、持ち上げるのがやっとだった「糞かき」を片手に持ち、知らぬ間に小さくなった父母の背中を見ながら、今日も牛舎の中に私はいます。

いつかこの夢が現実のものとなった時、私にはもう少しだけやってみたいことが2つあります。その1つは、自分で改良して作った牛で全共に出品し、グランドチャンピオンを獲ること。私の家では父がレッドの改良にも力を入れており、父と協力して頭数を増やし、共進会にも出品したいです。もう1つは、自分で搾った乳でチーズを作ること。私はクリームチーズが好きなので、フレッシュタイプのチーズに挑戦してみたいです。そして、販売も出来たらいいなと思っています。

酪農は、知れば知るほど奥が深く難しい仕事。様々な問題を抱えている職業だとも思います。しかし、牛を愛する気持ちを持ち続け、これからも挑戦し続けたいと思います。